

【注意】解答はすべて、別紙の解答用紙の解答欄におさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

【二次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。】

小田原熱海間に、軽便鉄道敷設の工事が始まったのは、良平の八つの年だった。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行った。工事を——といったところが、ただトロッコで土を運搬する——それがおもしろさに見に行ったのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後ろに佇んでいる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走って来る。煽るように車台が動いたり、土工の絆纏の裾がひらついたり、細い線路がしなつたり——良平はそんなけしきを眺めながら、①土工になりたいと思う事がある。せめては一度でも土工といっしよに、トロッコへ乗りたいと思う事もある。トロッコは村外れの平地へ来ると、自然とそこに止まってしまふ。と同時に土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りるが早いか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さえできたらと思うのである。

ある夕方、——それは二月初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行った。トロッコは泥だらけになったまま、薄明るい中に並んでいる。が、そのほかはどこを見ても、土工たちの姿は見えなかった。三人の子供は恐る恐る、一番端にあるトロッコを押しした。トロッコは三人の力が揃うと、突然ごろりと車輪をまわした。良平はこの音にひやりとした。しかし

20

15

10

5

②二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。ごろり、ごろり、——トロッコはそういう音とともに、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登って行った。

そのうちにかれこれ十間ほど来ると、線路の勾配が急になり出した。トロッコも三人の力では、いくら押ししても動かなくなつた。どうかすれば車といっしよに、押し戻されそうにもなることがある。良平はもういいと思つたから、年下の二人に合図をした。

「さあ、乗ろう？」

彼らは一度に手をはなすと、トロッコの上へ飛び乗った。トロッコは最初おもむろに、それから見る見る勢いよく、一息に線路を下り出した。その途端につき当りの風景は、たちまち両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開して来る。——良平は顔に吹きつける日の暮れの風を感じながらほとんど有頂天になってしまった。

しかしトロッコは二、三分の後、もうもとの終点に止まっていた。しかしトロッコは二、三分の後、もうもとの終点に止まっていた。

「さあ、もう一度押すじゃあ。」
良平は年下の二人といっしよに、またトロッコを押し上げにかかった。が、まだ車輪も動かないうちに、突然彼らの後ろには、誰かの足音が聞こえ出した。のみならずそれは聞こえ出したと思うと、急にこういう怒鳴り声に変わった。

「この野郎！ 誰に断つてトロに触つた？」

そこには古い印絆纏に、季節外れの麦藁帽をかぶつた、背の高い土工が佇んでいる。——そういう姿が目にはいつた時、良平は年下の二人といっしよに、もう五六間逃げ出していた。——それぎり良平は使いの帰りに、人気がない工事場のトロッコを見ても、二度と乗つてみようと思つた事はない。ただその時の土工の姿は、今でも良平の頭のどこかに、はつきりした記憶を残している。薄明かりの中に仄めい

45

40

35

30

25

た、小さい黄色の麦藁帽、——しかしその記憶さえも、年ごとに色彩は薄れるらしい。

その後十日余りたつてから、良平はまたたつた一人、午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた。すると土を積んだトロッコのほかに、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になるはずの、太い線路を登って来た。このトロッコを押しているのは、二人とも若い男だった。良平は彼らを見た時から、なんだか親しみやすいような気がした。「この人たちならば叱られない。」——彼はそう思いながら、トロッコの側へ駆けて行った。

「おじさん。押してやろうか？」
その中の一人、——縞のシャツを着ている男は、俯向きにトロッコを押したまま、思った通り快い返事をした。

「おお、押してくよう。」
良平は二人の間にはいると、力いっぱい押し始めた。

「われはなかなか力があるな。」
他の一人、——耳に巻煙草を挟んだ男も、こう良平を褒めてくれた。そのうちに線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくとも好い。」——良平は今にも言われるかと、^③内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起こしたぎり、黙々と車を押し続けていた。良平はとうとうこらえ切れずに、怯ず怯ずこんな事を尋ねてみた。

「いつまでも押していて好い？」
「好いとも」
二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。
五六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。そこには両側の蜜柑畑に、黄色い実がいくつも日を受けている。

70

65

60

55

50

「登り路のほうが好い、いつまでも押させてくれるから。」——良平はそんなことを考えながら、全身でトロッコを押すようにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになった。縞のシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と言った。良平はすぐに飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の匂いを煽りながら、ひたひたに線路を走り出した。「押すよりも乗るほうがずっと好い」——良平は羽織に風を孕ませながら、当たり前の事を考えた。「行きに押すところが多ければ、帰りにまた乗るところが多い。」——それもまた考えたりした。

竹藪のある所へ来ると、トロッコは静かに走るのを止めた。三人はまた前のように、重いトロッコを押し始めた。竹藪はいつか雑木林になった。爪先上りの所々には、赤錆の線路も見えないほど、落葉のたまっている場所もあった。その路をやっと登り切ったら、今度は高い崖の向こうに、広々と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、あまり遠く来過ぎたことが、急にはつきりと感じられた。

三人はまたトロッコへ乗った。車は海を右にしなから、雑木の枝の下を走って行った。しかし良平はさっきのように、面白い気もちにはなれなかった。「もう帰ってくれば好い。」——彼はそうも念じてみた。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼らも帰れない事は、もちろん彼にもわかり切っていた。

その次に車の止まったのは、切り崩した山を背負っている、藁屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へはいると、乳呑児をおぶさった上さんを相手に、悠々と茶などを飲み始めた。良平は独りいらししながら、トロッコのまわりをまわってみた。トロッコには頑丈な車台の板に、跳ねかえった泥が乾いていた。

少時の後茶店を出て来しなに、巻煙草を耳に挟んだ男は、(その時

95

90

85

80

75

はもう挟んでいなかったが)トロッコの側にいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子だかしをくれた。良平は冷淡れいたんに「ありがとう」と言った。が、すぐに冷淡れいたんにしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕つくろうように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂においがしみついていていた。

三人はトロッコを押しながら緩い傾斜けいしゃを登って行った。良平は車に手をかけていても、心はほかの事を考えていた。

その坂を向むこうへ下り切ると、また同じような茶店があつた。土工たちがその中へはいった後、良平はトロッコに腰をかけながら、帰る事ばかり気にしていた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかっている。トロッコの車輪を蹴けってみたい、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押ししてみたり、——そんなことに気もちを紛まぎらせていた。

ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にこう言った。

「われはもう帰んな。おれたちは今日は向むこう泊とまりだから。」

「あんまり帰りが遅おそくなるとわれの家でも心配するぞら。」

良平は一瞬間いつしゆんかんあつ呆気にとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年の暮母と岩村まで来たが、今日の途みちはその三四倍ある事、それを今からたつた一人、歩いて帰らなければならぬ事、——そういう事が一時にわかつたのである。良平はほとんど泣きそうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いている場合ではないとも思つた。彼は若い二人の土工に、取つて付けたようなお時宜ときぎをすると、どんだん線路伝いに走り出した。

良平は少時しばらく無我夢中に線路の側を走り続けた。そのうちに懐ふところの菓子包みが、邪魔じゃまになる事に気がついたから、それを路側みちばたへ抛ほうり出だした。

100

105

110

115

120

125

すついでに、板草履いたぞうりもそこへ脱ぬぎ捨ててしまつた。すると薄い足袋たびの裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遙かに軽くなつた。彼は左に海を感じながら、急な坂路さかみちを駆け登つた。時々涙がこみ上げて来ると、自然に顔が歪ゆがんでくる。——それは無理に我慢がまんしても、鼻だけは絶えずくうくう鳴つた。

竹藪ひがねやまの側を駆け抜けると、夕焼けのした日金山の空も、もう火照りが消えかかっていた。良平はいよいよ気が気でなかつた。往ゆきと返かえりと変わるせいか、景色の違ちがうのも不安だつた。すると今度は着物までも、汗あせの濡ぬれ通とおつたのが気になつたから、やはり必死に駆け続けたなり、羽織を道側へ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ来るころには、あたりは暗くなる一方だつた。「命さえ助かれば——」良平はそう思ひながら、迂つてもつまずいても走つて行つた。

やつと遠い夕闇ゆうやみの中に、村外れの工事が見えた時、良平は一思いに泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駆け続けた。

彼の村へはいつてみると、もう両側の家々には、電燈でんとうの光がさし合つていた。良平はその電燈の光に頭から汗の湯気の立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端いどばたに水を汲くんでいる女衆や、畑から帰つて来る男衆は、良平が喘あえぎ喘あえぎ走るのを見ては、「おいどうしたね?」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋とこやだの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口かどぐちへ駆けこんだ時、良平はとうとう大声に、④ わつと泣き出さずにはいられなかつた。その泣き声は彼の周囲へ、一時に父や母を集まらせた。ことに母はなんとか言ひながら、良平の体を抱かかえるようにした。が、良平は手足をもがきながら、啜すすり上げ啜すすり上げ泣き

130

135

140

145

150

150

続けた。その声あまり激しかったせい、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集まって来た。父母はもちろんその人たちは、口々に彼の泣く訣を尋ねた。しかし彼はなんと言われても泣きたてるよりほかに仕方がなかった。あの遠い路を駆け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、……

★

良平は二十六の年、妻子といっしょに東京へ出て来た。今ではある雑誌社の二階に、校正の朱筆を握っている。が、彼はどうかすると、全然なんの理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然なんの理由もないのに？——⑤塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細々と一すじ断続している。……

〔『現代日本文学全集 26 芥川龍之介集』所収「トロツコ」より〕

問一 この文章の★～★までの部分は、大きく三つの段落に分けることができます。第二段落と第三段落の始まりはどこからになりますか。それぞれ最初の五字を抜き出して答えなさい。

問二 ①「土工になりたいと思う事がある」とありますが、そのときの「良平」の気持ちをわかりやすく説明しなさい。

問三 ②「二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった」とありますが、なぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問四 ③「内心気がかりでなかった」とありますが、このときの「良平」の気持ちをわかりやすく説明しなさい。

問五 ④「わっと泣き出さずにはいらなかった」とありますが、なぜですか。わかりやすく説明しなさい。

問六 ⑤「塵労に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細々と一すじ断続している。……」とありますが、これは成人した「良平」のどのような思いを語っていると考えられますか。トロッコを押していた少年期との共通点をふまえて、わかりやすく説明しなさい。

二次の文中の①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。字は一画ずついいねいに書きなさい。

今日、多くの情報が、各種①ホウドウ機関から②テイキヨウされるようになった。私たちは、その表面的な③インショウや流行だけにとらわれず、常にものごとの本質を④ツイキユウする洞察眼(どうさつがん)を持てるように⑤ツトめなければならぬだろう。